

石巻市内の全ての応急仮設住宅が1月に解消になった。最後の一人が仮設住宅を出るまで。その思いで前職のNPOを退職し、石巻の支援者らと共に任意団体を立ち上げて活動してきた私にとつて大きな節目になるはずだった。「おめでとー」「私たちも頑張ったね。そんな想像をしていたが、何とも「追い出され感」の否めない、残念な終わり方だった。

最後の住民Sさんが東日本大震災前に暮らしていた地区では、大規模な区画整理が行われ、道路が整備されたのは、つい最近だ。境界トラブルもあり、自宅の再建に時間がかかっていた。「再建まで仮設住宅に」という希望もかなわず、Sさんは復興住宅に転居を余儀なくされた。そして、あろうことか、まだSさんが住んでいるのに解体工事が始まった。工期を決めた方々は、本人が受けるストレスや、それがもたらす健康被害を考えたことがあるのだろうか。

# 座標



石巻の仮設住宅では2、3年前入居数の少なくなった団地から拠点団地へ移転する「集約」が行われた。集約には住民の孤立防止や治安維持といった利点もあるが、スケジュールがとて急で住民が疲弊するケースも見られた。

ある女性は移転先が決まって2週間で引越さなくてはならず、しかも繁忙期で平日にしか業者を頼めなかった。朝、元の仮設住宅から登校した娘さんは、夕方に新しい仮設住宅に帰ってくる。そんな状況の中、移転後すぐに普段通り生活できるよう2週間ほどは徹夜で荷造りしたそだ。家族5人が

## 「追い出され感」否めず

「座標」執筆者 7月12日  
岩元 暁子氏 石巻復興きずな新聞舎代表(東京都練馬区)  
立岡 学氏 NPO法人ワンファミリー(仙台市青葉区)  
榎本 歩美氏 国際教養大准教授(秋田市)  
篠木 雄司氏 アポロガス会長(福島市)  
三上 友氏 I・M・S社長(弘前市)  
紺野 敏昭氏 こんの神経内科・脳神経外科クリニック院長(滝沢市)  
梅津 吉裕氏 酒田光陽高教諭(酒田市)

6年間住んだ家。さぞ大変だったろう。数カ月後、彼女は脳卒中で倒れてしまう。一命は取り留めたが半年間入院し、今も半身不随だ。医師には「引越しのストレスが原因だろう」と言われたそだ。「本当は2週間で引越さないとけないけれど、あなたは5人家族で仕事もしていて、高齢の親御さんやお子さんもいて大変だろうから、1カ月後でいいですよ。」市役所の担当者は、そう言っただけでほしかった。失った右半身の自由はもう戻らないのだ。

石巻復興きずな新聞舎代表  
岩元 暁子  
(東京都練馬区)

先のSさんは、今も段ボールに囲まれながら復興住宅で暮らしている。彼が自宅を再建できるその日まで、見守っていくつもりだ。



いわもと・あきこ氏 1983年、横浜市生まれ。上智大文学部卒。日本マイクロナブ社を経て、東日本大震災後、石巻市でボランティア活動。2012年4月にピースポータル災害支援センターのスタッフとして「仮設きずな新聞」編集長などを担当。16年4月に石巻復興きずな新聞舎を設立。東京都内で働きながら石巻に通う。

## 仮設住宅解消